

さかちょうまえた
坂長前田遺跡
現地説明会資料



財団法人 鳥取県教育文化財団では、一般国道 181 号（岸本バイパス）の改良工事に伴い、伯耆町坂長にある『坂長前田遺跡』の調査を 3 月から実施しています。

調査の結果、県内初となる平安時代末の大鎧の小札をはじめ、縄文時代から江戸時代までのさまざまな遺物が出土しました。縄文時代には狩場などに利用された自然流路が、奈良時代以降は下流の水田に水を引くための水路として、繰り返し掘り直されるという土地利用のありさまが分かりました。

平成 21 年 10 月 24 日(土)
財団法人 鳥取県教育文化財団

坂長前田遺跡の性格

縄文時代と弥生時代（約 1700 年前まで）には、坂長前田遺跡は、自然の川が流れ石が転がる河原のような環境でした。100 点以上の石鏃が発見されているので、水場に来る動物を狙った狩りの場であったと考えられます。黒曜石のかけらが大量に見つかっていることから、石器などの道具作りにも利用されていたようです。

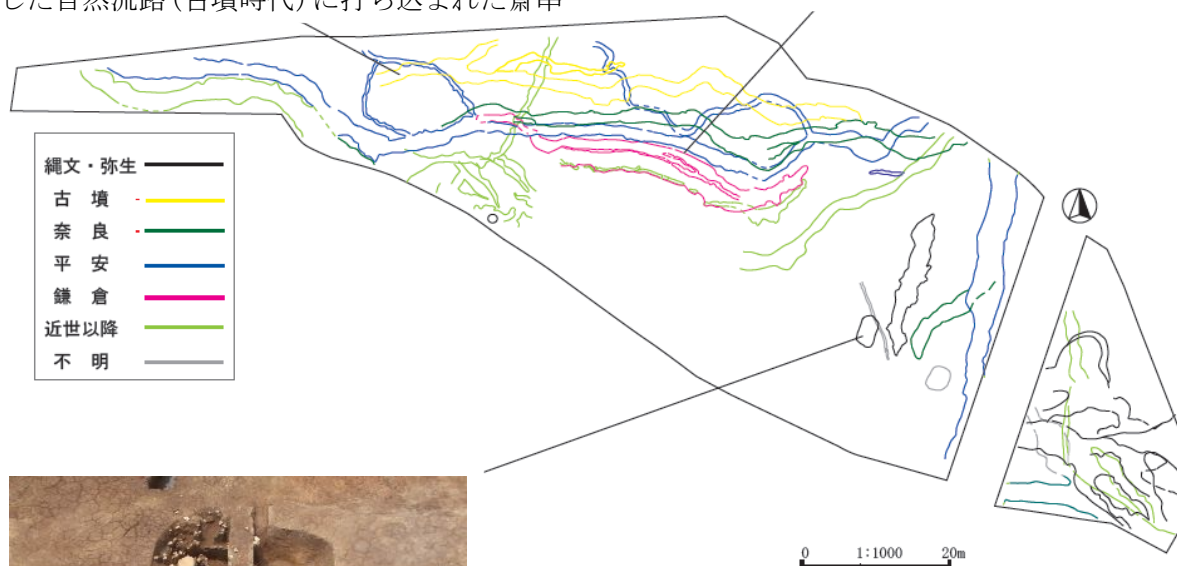
遺跡がある谷は、湧水が豊富で日野川の洪水の影響を受けないため、米作りに最も適した場所でした。奈良時代から鎌倉時代（約 1300 年前から 700 年前まで）にかけて、下流にある水田のための水路として川は付け替えられます。水路は古い河道に堆積した石を避けて山裾の土の部分削って設けられ、土砂で埋まる度に山側に掘り直されました。この頃には、水辺は祈りの場でもあったようで、船形・人形・馬形などの祭祀具が多く出土しています。室町時代頃から江戸時代初め（約 400 年前）までは、この土地は溜池の底に沈んでいたと考えられます。



埋没した自然流路（古墳時代）に打ち込まれたいぐし斎串



整然と並ぶ平安・鎌倉時代の水路



縄文土器と石器がつまった土坑



石鏃・石匙・石錘・磨製石斧



縄文土器



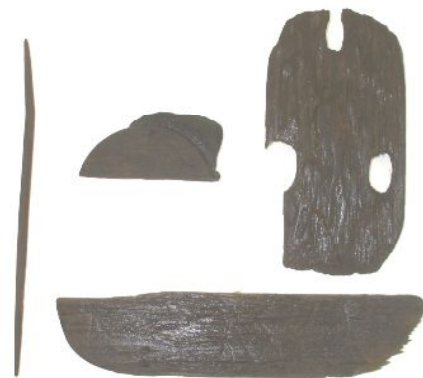
弥生土器



鉄鏃・馬具・鉄製紡錘車



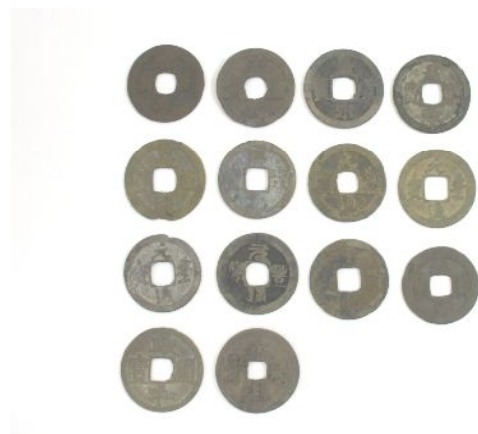
木製祭祀具（人形・陽物・馬形・船形）



木製品（箸・漆器・容器底板・下駄）



馬の歯と動物の骨



中国銭（北宋銭・明銭）

きのなりもり おおよろい **紀成盛の大鎧か？** 県内初の平安時代末の鉄製小札 こざね

大鎧の胴部のほか草摺くさずりや大袖おおそでなどにも用いた部品で、鉄製の「本小札ほんこざね」という種類のものです。革製の小札を主体に、要所に鉄製の小札を混ぜて使うことが多かったようです。形や製作技術から 11 世紀後半から 12 世紀頃の平安時代末のものと考えられます。この時期の大鎧は、全国的にも数が少なく、多くが国宝や重要文化財に指定されています。県内には破片も含めて現存しておらず、遺跡から出土したのも初めてです。

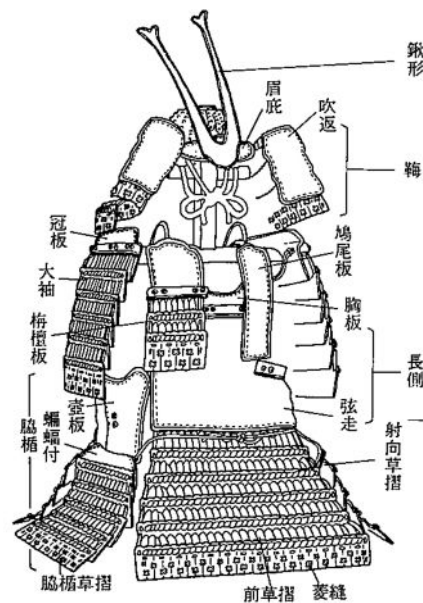
大鎧は騎馬武者の騎射戦用に作られたもので、高位の武将が着用する場合が多いとされます。この時期に坂長地区を本拠地とした武将には紀成盛がおり、成盛かその近親者が使用した可能性があります。坂長前田遺跡からは、4 本の鉄鏃や 12 本の馬の歯などが出土しているので、記録には残っていませんが、古戦場であるかもしれません。不明な点が多い紀成盛の生涯を研究する上で重要な資料になりそうです。



鉄製小札

紀 成盛 (生没年不明)

平安時代末の西伯耆の豪族。別名海六兵衛成盛。『源平盛衰記』では平家方として一ノ谷の合戦に登場する。倉吉のおがももとやす小鴨基保と激しい抗争を繰り広げ、最盛期には、源氏方として三徳山の「院の御子」なる人物を奉じて、伯耆国半分と美作国の一部を支配した。焼失した大山寺の再建に尽くし、重要文化財の鉄製厨子ずしを奉納したことで有名。坂長地区では長者屋敷遺跡が屋敷跡と伝えられるほか、「成盛長者」「木の森長者」としてさまざまな伝説が残っている。



大鎧の部分名称

(奈良文化財研究所『古代の官衙遺跡Ⅱ』より)

連絡先

財団法人 鳥取県教育文化財団 調査室 岸本調査事務所
 所在地 鳥取県西伯郡伯耆町大殿 1066-2
 電話・FAX 番号 0859-39-8077